

とある科学の数値改竄
《凍結》

RK6246

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人口約230万人の学園都市。そのうち約8割が学生であるこの街で頂点に君臨する7人のLEVEL5がいる。

都市伝説で噂されている8人目のLEVEL5。彼の存在を知っている人物は少ない。そんな彼がこの学園都市で過ごす話。

目次

幻想御手「レベルアップ」編

例外超能力者（アウト オブ オー

ダー） | 1

#2 パレット | 8

#3 風紀委員177支部 | 12

#4 交渉 | 21

#5 パレット青 | 27

#6 増援その1 | 41

幻想御手「レベルアップ」編

例外超能力者（アウト オブ オーダー）

第7学区、某ファミレスで優雅にミルクティーを飲んでいる男子学生がいる。彼の近くの席に常盤台の制服を着ている生徒の姿があった。そんな彼女のもとに友人が駆け寄ってきた。

佐天「御坂さん！御坂さん！幻想御手より面白そうな都市伝説を見つけました！」

御坂「どうしたの佐天さん、いつもより元気そうだけどそんなに面白そうな都市伝説を見つけたの？」

佐天「はい！」

御坂「なら初春さんや黒子達が来るまでお楽しみにしとくわ。」

佐天「いえ、2人にはあとで伝えるので先に御坂さんだけ聞いてください！」

御坂「そんなに面白そうな都市伝説見つけてきたんだー」

佐天「はい！それにこの都市伝説多分御坂さんが一番興味ある話だと思うんですよ！」

御坂「そーなんだ、じゃあ教えて。」

佐天「はい！……の前に、御坂さんに質問ですが、他のレベル5についてどれぐらい知ってますか？」

御坂「私以外のレベル5の6にんねろ、まあ五位については知ってるけどほか5人については知らないな」

佐天「そうですか。ならこの都市伝説には驚きますよ！な、な、なんと！この学園都市に8人目のレベル5がいるみたいなんです！」

？「ブフオツ！」

二人の近くにいた紅茶を飲んでる男子学生が驚いたのか紅茶を吹いてしまった。が、そんな変人のことをスルーして二人は話し続けた。

御坂「……どーゆーこと？」

佐天「そのまんまの意味です。」

御坂「それは最近新しく誕生したってこと？」

佐天「いえ、もともと存在していたみたいです。ただ能力がちよつと中途半端なので順位をつけることが難しく、そこからついた名前が例外超能力者（アウト オブ オーダー）らしいです。」

御坂「アウト オブ オーダーねろ。それ絶対ガセでしょ。」

佐天「もう御坂さんはゆめがないな。そんな風に夢がないと将来殿方とお付き合ひできませんよ。」

御坂「ぼっ！なっ！なに言ってるんのよ！なんで私があいつと付き合うのよ！」

佐天「あいつ…一応気になってる人はいるんですけどねえ」

御坂「なっ！なに言ってるんのよ！いないわよそんなの！」

佐天（かわいいのう）

そんな時会話をしている二人の近くの席の男子高校生？が立ち上がった。そのままお金を払ってファミレスを出た。ファミレスを出てしばらく歩くと自分の携帯電話が鳴った。彼はスマホの画面に「ノイマン」と表示されていた。彼はそれを見て電話に出た。

？「もしもしノイマン」

ノイマン『出たか。早かったな。』

？「何の用？おつかい？それとも仕事の依頼でもきた？」

ノイマン『後者だ。』

？「内容は？」

ノイマン『第10学区にある仮拠点に来てから話す。シノと海莉はもう来てる。とりあえず今は1:30だ。2:15までに来い。』

？「リョーカイ、それじゃあ向かい始めるわ。」

それから彼は拠点の方へ向かった。

向かっている途中工事現場の近くを通る。

（まあ、た新しいビルができるんだ。よく費用があるな。）

そう考えてた次の瞬間ちようどクレーンで持ち上げてた鉄骨が落ちてきた。彼は一瞬驚いた、が、彼は冷静になった。そして彼は演算を開始した。

（大体100mぐらいの高さから落ちてくるから式をたてて結果時速44km/hで分単位に変えると733m/m、秒単位は秒速12m/sで落ちてくる。∴結構速いな。）

そんなことを考えていくうちに鉄骨と自分との距離が短くなっていく（落下を止めることはできないからやつぱり減速させたほうがいいな。）

そしてちようど50mぐらいの高さに来た時速44km/hで落ちてくる鉄骨。

（んじや、時速44km/hを時速1m/hに改竄。と）

そしてたら急に鉄骨が減速した。

（このまま放置でもいいけど落下速度を下げただけで重さはそのまま。僕がここから離れたら鉄骨の落ちるスピードが戻っちゃう。めんどくさいけど上に戻しとくか。）

そして彼は自分にかかっている重力の数値を0に改竄して鉄骨の近くまで飛んだ。

そして鉄骨に触れて演算を始める。

(え〜と、鉄骨の重さは7.85×その鉄骨の体積。とりあえず式ははしよってこの重さは79.9kg、多分、きつと、あつてるといいな。)

(それで79.9kgを…まあ100gに改竄して、これ持つて上に行くか。でも摩擦係数操作してのぼるのめんどくさいな、…磁力を操作してのぼるか。)

それから彼は100gにしたの鉄骨を持つて磁力で工事中のビルを登り鉄骨をもとももあつた場所に戻しに行つた。

登り終わつて足場に乘ると周囲の作業員の方々が空いた口が塞がらないという言葉が似合っている顔をしていた。

？「ワイヤーが切れて落ちてきた鉄骨を返しにきました〜」

そう作業員の方々に報告した。そしたらその現場の責任者？が近づいてきた。仮にその人をAとしよう。

Aさん「すまないな坊主。ワイヤーを交換しようと考えてた頃だったがあと2、3回大丈夫だと思つた、がまちがつてたな。」

？「そうですね次からワイヤーがやばそうだったら仕事を始める前にかえてくださいな。今回は幸いにも僕が真下にいたから良かったですが僕がいなかったら学生や大人

が何人か下敷きになってましたよ。」

A 「それは本当にすまなかった。ところで坊主、お前は怪我しなかったのか？」

？ 「ああそれなら大丈夫ですよ。怪我はしなかったのです。それに怪我をしたとしてもいい医者を知っているのです。」

彼は鉄骨を下におろして重さを79.9 kgに戻した。

？ 「では、僕はもういきます。次から気をつけてくださいね。」

そう言つて彼は足場から飛び降りてつた。そして地上から高さ15 mぐらいの所でまた重力をゼロにして地上に着地した。着地した際に自分のことを見ていた人はたくさんいた。時間を確認すると目的の時間まであと15分しかない。仕事の時間に遅れるからと彼は自分の走るスピードを時速100 km/hに改竄して彼は拠点へ向かった。

—————

第10学区 2:14:21

彼の仕事場（仮拠点）はこの10学区にあるたくさんあるビルのなかの一つの地下に存在する。なぜ地下なのか。なぜ10学区なのか。それはもし他の組織が仮拠点が10学区にあるとバレても10学区には似たようなビルがたくさんあるから。そしてビルを壊されても拠点は地下にあるから壊されてもあまり被害がないからである。以上

の二つを持って第10学区が彼らにとつていい場所なのである。そして彼はとあるビルに入り、地下に行くためのエレベーターの使用が許可されているかどうかの認識装置に手をかざして本人確認して、エレベーターに乗って下へ降りていった。エレベーターが止まって扉が開くとそこには全身真っ白でアルビノを思わせる車椅子に乗った少女、右目に眼帯を、左腕には少し血のついた絆創膏と包帯が巻かれている少女、そして見た目が完全に女子だが本当は男の娘。彼女らは彼の組織仲間である。

ノイマン「では、リーダーの青染悠然も来たから暗部組織『パレット』本部、集会を始めよう」

暗部組織の中で人数が1番多い組織

『パレット』

そのリーダーである彼は

LEVEL 5 アウト オフ オーダー 例外超能力者青染悠然

能力

『数値改竄』
フレイクニユース

#2パレット

『パレット』とは表向きは暗部組織だが、実際やつてることは学園都市の裏と表の仕事である。例えば、『アイテム』は組織などの依頼を受けて報酬をもらう。『メンバー』は統括理事会からの依頼を受けて報酬をもらう。そして依頼の内容はそれぞれ違うが、表沙汰にはできない依頼である。しかし『パレット』は表沙汰にはできない依頼だけでなく、例えば風紀委員や警備員の援護などの裏の仕事だけではない。言ってみれば「何でも屋」みたいな感じである。そして他の暗部組織と違うのはそこだけではなく、大体の組織は4人体制で動いているが、『パレット』は19人体制で動いてる。だが19人は多すぎて、うまく仕事をこなせないから本部、青、赤、黄色、緑の5つのグループで大体4人ずつで分かれている。しかしわかっていると思うが、19人いて5つのグループで分かれているということは3人のグループもある、が、そんなことは気にしなくていい。

—————

そしてその組織『パレット』本部は依頼を受けてそのことに関する話し合いを行なっている。

ノイマン「さて、今回の依頼は裏の仕事ではないからそこは安心していいぞ。」

車椅子に座っている少女はそう言った。

シノ「いや、そもそも依頼としてきてるのなら安心なものじゃないでしょ。」

頭に少し大きめなりボンをつけた男の娘はノイマンに対し、そう言った。彼（彼女？）は少し嫌そうな顔をしている。

海莉「シノちゃん落ち着いて、いや、落ち着いてるか。。。で、今回の依頼は何ノイマン。」

不格好な熊のぬいぐるみを持った腕が傷だらけの彼女はシノに対しそう言った。

ノイマン「まあ、シノまあの言うとおりに我々に依頼が来ている時点で安心できるものではないがそこは多めに見てくれ。」

シノ「わかったよ。」

そんな無駄なのかわからない話をしていた彼女達しかし

青染「とりあえずその無駄話は一旦置いといて、改めて今回の依頼はどこどのいつからで何が目的で、報酬はいくらなのか教えて。」

ノイマン「そうだな。今回の依頼は風紀委員（ジャツジメント）や警備員（アンチスキル）の本部からの依頼だ。、と行ってもどちらかという風紀委員の177支部の増援を依頼されてる。」

シノ「あれ？あそこって「赤」の天谷と同じようにLevel 4の常盤台の空間移動能力者いなかったっけ？それに悠とも同じようにLevel 5の常盤台のレールガンもいるし大丈夫なんかじゃないの？」

海莉「確かにそうだね。なんで私たちに依頼してくるのかな？」

ノイマン「私の予測演算通りなら『幻想御手』（レベルアップ）の使用者が増えて、その学生の犯罪傾向が見られるし、ぶつ倒れるから使用者を保護する。しかし使用者数が多すぎて白井黒子だけでは止めることが難しい。そのための増援だ。」

青染「それだったら他の支部の風紀委員でよくない？なんでわざわざ僕らに頼るの？」

ノイマン「他の支部も177支部同様、使用者によく犯罪などを対処したりしているから無理だ。」

青染・シノ・海莉「・・・」

ノイマン「いくらお前らが仕事したくないからって無駄な抵抗はやめたほうがいい。それに報酬もそれなりにいい。」

青染「しやくないか。とりあえず177支部の人に状況を聞いてどのグループが増援に回るか決めるか。ノイマン、177支部の人に手伝うための明日話し合いの場を設けておいてと伝えといて。」

ノイマン「りよ〜かい。じゃあ177支部にメールを送つとく。向こうから連絡があつたら青が話し合いに行け。」

青染「当たりメエだ。でも念のため話し合いの時に前前のネットワークを僕の電話に繋げといて。シノと海莉は・・・結論が出るまで自由行動。」

次の瞬間二人は盛大に喜んだ。物騒でめんどくさい仕事を自分たちがしなくていいかもしれないということ二人はもうどこに遊びに行くか話し合っている。それを鬱陶しそうな目で見ているノイマンと、恨めしそうな目で見ている青染がいた。

#3風紀委員177支部

白・初「増援？」

固法「ええそうよ。」

初春「何で増援を？」

固法「最近犯罪行為を行う学生が増えてきたでしょ、それで白井さん1人だと大変でしょ。だから第2学区にある風紀委員本部に増援を要請したのよ。」

白井「でも犯罪行為を行う学生が増えたのは177支部の管轄外も一緒でしょう。それで本部に増援要請はできないのでは？」

固法「確かにそうよね。正直言って増援要請が通るのは私も予想外だったのよ。」

初春「じゃあ増援を送れるほど余裕があった支部があったんですか？」

固法「それがその増援としてくる学生、風紀委員じゃないのよ。」

白・初「は?!」

固法「予想通りの反応ね。」

初春「当たり前です！他の支部の風紀委員が来るならまだしも、そもそも風紀委員じゃない学生がきてどうするんですか?!」

固法「私もそう思うわ。でもせっかく増援が来るなら我慢するしかないのよ。」

白井「ていうかわたくしに増援なんて必要ありませんの！空間移動能力者であるわたくしがいればそんな犯罪を犯す学生捕まえるなんて簡単ですよ！早くその話をなかつたことにしてください！」

固法「なかつたことにはできないわ。」

白井「なんで?!」

固法「あなたたちまさか風紀委員じゃない人が増援としてくる話を私が反対しなかつたと思うの?」

初春「それは、」

固法「最初は反対したわよ。でもやっぱり白井さん1人だと怪我をしちゃうと思ったのよ。それにその組織も一応ちゃんとした組織だから。」

初春「組織だったんですか!?!」

固法「ええそうみたい。依頼してその依頼に見合つた報酬を払えばいいみたい。」

白井「その報酬は誰が払うんですの?」

固法「額はまだわからないけど私が払うわ。」

初春「そんな、固法先輩その報酬払えるんですか?!」

固法「さあ?わからないわ。」

白井「わからないって、もしぼったくりだったらどうするんですの！」

固法「まだ報酬はわからないからなんとも言えないわ。でも今日『パレット』の責任者の人と話をして、ぼったくりだったら諦めるわ。」

初春「その組織『パレット』っていうんですか？」

固法「そうよ後でここに来るから不満とかあつても抑えててね。」

白井と初春はまだ納得いってなかった。白井はまるで自分一人だと頼りないと言われているように感じた。しかし固法先輩の言ったように自分一人だと怪我をしてしまいかもしれない。そう考えてた。そして今の会話をノイマンはハッキングしたパソコンから盗聴していた。

(やっぱりあやしむよな。私たち『パレット』は依頼に見合った報酬を受け取る。学園都市の闇に関わる仕事だったら基本200万円以上だ。しかし表の仕事、つまり今回の依頼は大体10万以上80万以下といったところか。まあ今の話は青も聴こえてると思いうから無茶な額は要求しない…と願っておこう。)

そんな考えを巡らせていた頃青染はというと、

青染「177支部ってどこ？」

—————

side 青染

青染悠然、彼は道に迷っていた。

彼は先程のノイマンが行なった盗聴で聞こえてきた会話を聞いていた。しかし彼はいつもの癖でそれをBGMの代わりにいつものノリでふらふら全く違う方向に向かつて歩いてしまった結果道に迷ってしまったのである。ではノイマンのガイドでもと来た道を戻ればいいのだが、ノイマンは今演算中で話しかけても反応がないのである。彼は誰かに道を聞こうと考え丁寧に教えてくれそうな人を探した。

(あれは、い、)

目の前に学園都市第3位超電磁砲が友人と歩いてた。

(ナイスタイムング！たしか超電磁砲は風紀委員177支部の1人と仲が良かったはず。彼女に聞けば教えてくれるだろう。)

そんなことを考え終わった青染は早速超電磁砲に聞きに言った。

青染「あのーすみません」

御坂「はい？」

青染「僕、風紀委員177支部に行きたいんですけど道がわからないので教えてくれませんか？」

御坂「あんた、風紀委員177支部に用があんの？」

青染「はい。」

佐天「ちようどあたしたちもそこに向かつてるので一緒に行きませんか?。」

青染「おや? いいんですか?。」

佐天「はい! 御坂さんもいいですよね。」

御坂「別にいいわよ。」

青染「ではお言葉に甘えて。あつ、僕は青染悠然と申します。」

佐天「あたしは佐天涙子です。そしてこちらが…。」

御坂「御坂美琴。」

青染「御坂美琴…ああ超電磁砲か。…そうかく超電磁砲かあく道理で見たことがあつた気がしたんだよな。」

佐天「知ってたんですか?。」

青染「そりやねー僕の仕事場じゃあ覚えとかないとあとあと大変になるからね。」

御坂「仕事場?。」

佐天「それってバイトですか?。」

青染「まあバイトと似たようなもんだよ。」

そういうかんじのたわいもない話をしながら3人は風紀委員177支部に向かった。

—————

side 177 支部

多分佐天さんと一緒でしょう。…それにしても驚きました。まさか私のパソコンがハッキングされていて盗聴されていたとは。一応ハッキングしてきた人物の特定を試みましたが、嚴重なロックなどがたくさんかかっているあたりむこうも特定される前提でハッキングを行っていた。しかも見ている限りかなり手慣れている感じが…。それに『パレット』に関して調べてみましたけどほとんど情報がない。盗聴してきたのはそれいつらだったんでしょうか？さて、とりあえずそれは一旦置いといて、このことを白井さんや、固法先輩に報告したほうがいいのでしょうか？…いや、まだ特定できてないから報告は後回しにしますか。それにしても、依頼する際に揭示される金額はいくらなんでしょう？ぼったくりだったら弱み握って金額を下げさせる、もしくはタダにしてもらうか。まあーその時まで待ちましょう。）

などと少々えげつないことを考えてた2人であった。

—————

side 青染

青染は御坂さんと佐天さんとともに177支部たどり着いたのである。

青染（さうでなんとか177支部に着いたけど、話し合いはうまく行くかな？むこうはぼったくりされることも頭に入れてるし、それにぼったくりしたらなんかされるし。女子中学生って怖い。）

そんな感じで彼は支部に入ることのためらっていた。でも入らないと話し合いができないし、という感じで入れなかった。

佐天「青染さん？大丈夫ですか？」

御坂「ちよつと、早く入りなさいよ。」

青染「あのー御坂さん代わりに開けてもらえませんか？なんか怖いことが起こりそうなので。」

御坂「怖いこと？はわからないけどとりあえず先に入っているのね？」

そう言つて超電磁砲は先に入つていった。と思つたら

白井「おねえさまー！！！！」

急に超電磁砲のもとに空間移動能力者である白井黒子が飛んできた。

御坂「ちよつと、黒子！急に抱きついてくるんじゃないわよ！」ビリビリ！

白井「OH、おねえさまの電撃、いや、愛の鞭！いただきました！やっぱりおねえさまは黒子のことを愛しているのですね！」

御坂「確かにあんたは大事な後輩だけどこれは愛じゃないに決まつてるでしょ！」ビリ

ビリ×2

白井「ギャー！！！！」

その瞬間空間移動能力者がその名の通り真つ黒焦げになった。

初・佐・青「……………」

青染「御坂さん、いくら相手の愛が激しいからって常盤台の超電磁砲が殺人を起こしちゃダメだろ。」

御坂「そうね、いくらこんなんでも殺しちゃうダメだったわ。どうしましょ。」

青染「とりあえず風紀委員に見つかる前にどっかに捨ててくるか。」

初春「あの、ここ風紀委員の支部ですけど。」

青・御坂「……………」

青染「御坂さん、短い間でしたがあなたの優しさは忘れません。罪を償ってください。」

白井「勝手に殺さないでくださいまし！」

青染「えっ、あれだけやって生きてるんだ。すごいな。…君、ウチに来ない？」

白井「どなたかわかりませんがお断りさせていただきますの！っていうかあなたは誰ですか！」

初春「そういえば。うちの支部に何か用ですか？」

青染「あ、自己紹介が遅れましたね。はじめまして。僕は組織『パレット』の責任者の青染悠然と申します。」

白・初「、、えっ、あなたが？」

#4 交渉

青染「改めてはじめまして。『パレット』の責任者青染悠然と申します。」

固法「風紀委員177支部の一人固法美偉です。先程御坂さんに飛びついた変態「誰が変態ですよ！」は白井黒子さんで、そのパソコンをいじっている花飾りの子は初春飾利さんです。」

青染「固法さん高2ですよね。」

固法「そうですね。」

青染「じゃあぼくにやータメでいいですよ。ぼく高1なんで。」

固法「そう、じゃあタメ口にさせてもらうわね。」

青染「はい、にしても白井さん？の愛の表現の仕方が激しいんですね。」

固法「確かにそうねー。困ったものだわ。」

御坂「ほんとですよ！」

白井「愛の表現の仕方ぐらい自由だと思えますの！」

佐天「ははは、」

――数分後――

青染「それでは依頼内容の確認ですか、犯罪を犯す学生が少なくなってきたまでの期間の増援ですね。」

固法「ええ、そうね。ここ最近犯罪を犯す学生が増えてきたから。」

青染「では1か月くらいを目安でいいですね。」

固法「それくらいね。」

青染「それにしても我々『パレット』に増援を依頼するくらい増えてきたんですね。どうしてだろ？」

固法「わからないわ。しかも常盤台の眉毛事件の犯人もレベルと能力の強さがあつてなかつたりしてるしね。短期間で能力を強化させられる方法でもあるのかしら。御坂さん何か知ってる？」

御坂「いいえ、私でも短期間でレベルを上げたことがないのでわかりません。」

青染「あれ？この人たち幻想御手の存在にまだ知らないの？」

佐天「だーかーら、幻想御手ですって！」

初春「佐天さん、また都市伝説の話。」

青染「都市伝説怖っ！どうやってそういう噂が広がるんだろ？」

佐天「青染さん幻想御手知ってますか？」

青染「知らないふりをしとくか。「れべるあっぱー？」」

佐天「知りませんか？あたしみたいなlevel0でも能力者になれる道具見たいらしいです。あたしも探しているんですけどみつかからないんですよ。」

白井「佐天さん？あなたまた変なことを調べて！危険なものだったらどうするんですか！」

青染「確かに美味しい話だけど怪しい臭いがプンプンするね。でもまあローマンを感じるね。」

佐天「そうですよね！そうですよね！青染さん都市伝説に興味あるんですか？」

青染「まあ都市伝説ってほとんど人が人に知られたくないような内容が少し形が変わって生まれるからね。だからその都市伝説が生まれたきっかけはなんなのか知りたいたいよね。」

佐天「なるほど！じゃあ青染さんこんな話知ってますか？」

青染「どんな話？」

そういつて彼は出されたお茶を一口飲もうと口に運んだ。

佐天「level5の8人目が存在するという話ですよ！」

青染「ブフォ!!・・・あっち!!」

初春「青染さん！大丈夫ですか!？」

青染「ああーまーうん。少し驚いただけ。」（なんデエ〜!!なんでその情報が漏れて

んのくく!!都市伝説怖っ!!)

固法「少し話が逸れたけど、とりあえず依頼を受けるということでいいわね?」

青染「はい、では報酬の話になりますか?」

風紀委員の三人は神妙な顔になった。

固法(ついにきたか。)

白井(ぼつたくりで依頼をなかったことにして逆ギレしてきたときの準備は大丈夫。)
初春(弱みはまだ握れてないからタダは無理だと思えますがちよつと脅せばなんとか
なるでしょう。)

などと相変わらさずえげつないことを考えていた人もいたが、

青染「ざつと7〜10万円くらいでしょう。」

白・初・固「ふえ?」

青染「高すぎましたか?」

固法「いや、思ってたよりずっと安かったから。」

初・白(コクコク)

青染「いったいいくらだと思ってたんですか?」

固法「90万」

白井「120万」

初春「500万」

青染「僕らのことをそんな風に思ってたの？」

白井「そりゃー聞いたこともない組織ですからね。」

青染「え。」

初春「それで、何人くらい増援としてくるんですか？」

青染「今回の依頼でちょうどよさそうなチームは『パレット』の青ですからそいつらを来させます。」

御坂「青？」

青染「ああいてませんでしたね。うちの組織『パレット』はメンバーが19人もいますからそれを5つに分けたんですよ。それぞれ色を名前にしてるんですよ。青、赤、黄色、緑と本部です。ちなみに僕は本部の者です。」

固法「なぜ本部だけ色じゃないの？」

青染「作者がめんど・じゃなくて思いつかなかったからです。」

固法「そつ、そう」

白井「その青にはどんな人がいるんですの？」

青染「簡単に言えば、level4の中学2年生が4人です。」

青染以外「・・・え？」

青染「・・・え？」

#5 パレット青

放課後の学園都市、とある学校でその4人がいた。

とうじょうあらた
東城新太「雅樹、今日の夕飯はなんだ？」

かみやまさき

上山雅樹「うくん、昨日はカレーだったから今日はサバの味噌煮かな。」

よつぎかえで

世継楓「雅樹も今日も食べに行っていていい？」

雅樹「いいよー」

とびやまゆうだい

鳶山勇太「楓さん、ここ1週間雅樹君と新太君の寮に入って夕飯食べてるけどさすがに

今日はだめでしょ。」

楓「別にいいでしょ、ちゃんと食費は払ってるんだから。」

勇太「まあーそうだけど。」

新太「そう言う勇太だって食費払ってるじゃん。」

勇太「だつてー」

《ラン、ランランランランラン、ランランラララン、ランランランララランランラン、ラララランランラン》

雅樹「新太、ナウシカのワンシーンのBGMを着信音にするのいい加減やめろよー。」

新太「別にいいだろ！この曲好きなんだから！」

楓「なにきれてんの？」

新太「ウツセー！」

勇大「早く電話出たら新太君。」

新太「そうだな。」

〃カチャ〃

新太「あ、ノイマンからだ。」

雅樹「え、今日の夕飯5人分作んないといけないの？」

新太「かもな。〃ピツ〃もしもしノイマン？何の用？また夕飯食べにくんの？」

ノイマン『いや、今日は違う。ちなみに今日の夕飯はなんだ？』

新太「サバの味噌煮だよ。」

ノイマン『そうか。・・・まあそれは置いといて、おまえら青に依頼が来てる。』

新太「はあ？」

ノイマン『依頼内容は明日から風紀委員177支部の増援だ。』

新太「おいつ、ちよつと待て！」

ノイマン『ちなみにもう依頼はおまえらに受けさせるって事でもう決定したから反論は受け付けない。』

新太「おい！」

ノイマン『詳細は後で全員にメールで送る。』

新太「ちよつと待てノイマン！」

“ピーツ、ピーツ、ピーツ”

雅樹「どうしたの？新太？」

新太「クソツタレ!!」

勇大「なにがあつたの、新太君。」

新太「依頼だよ！依頼！しかも勝手に受けさせられた！」

楓「別に依頼ぐらいいいじゃない。」

雅樹「それで依頼内容は？」

新太「風紀委員177支部の増援。しかも明日から！」

楓「はあ？急すぎるでしょ！」

新太「ほんとだよ！」

勇大「まあまあ二人とも落ち着いて。」

雅樹「でもなんで風紀委員の増援なんだろう。」

楓「最近犯罪の数が増えるからじゃない？」

雅樹「この前の銀行強盗の事件は超電磁砲が解決したって話もあるけど。」

「ピロリン、ピロリン」

楓「あつ、メールだ。」

「……その頃177支部では……」

その空間には音がなかった。いや、正確に言う機会や呼吸、心音はあるが、誰一人あいた口が塞がらない状態だった。その音がない空間で最初に声を出したのは

初春「えつと、level4が4人デスカ？」

青染「はい、そうですよ。」

初春「すごすぎませんか？」

青染「いや、うちの組織の平均はlevel4ですよ。」

初春「ふえ?!」

御坂「ほんとに大丈夫なの？あんたの組織。」

青染「大丈夫ですよ。別に悪いことはしてない、と思いますよ。多分。」

固法「ま、まあ大丈夫でしょ。それよりあなたたち門限は大丈夫なの？」

白井「えっ、」

現在の時間17:50

御坂「ヤバ！時間が、」

白井「まずいのです！このままだと寮監にまた首の骨がへし折られますの！」

青染「首の骨が折られる?！」

固法「もう切り上げていいからあなたたちはもう帰りなさい。」

白井「ありがとうございますございます固法先輩！」

御坂「行くわよ黒子! テレポートおねがい!」

白井「ハイですの!」

〃
シユン!
〃

佐天「行っちゃいましたね。」

初春「そうですね。」

固法「佐天さんも早く帰りなさい。もう下校時間すぎてるから。」

佐天「そうですね。初春は?」

初春「私はもうしばらく仕事をしてからかえります。」

佐天「わかった」

固法「でも今の時間不良が出ると思うけど大丈夫なの?」

佐天「大丈夫ですよ。近道を通れば間に合いますから。」

初春「佐天さんの言う近道は不良が出る道だと思いますが。」

佐天「・・・だ、大丈夫だよ、タブン」

固法「大丈夫じゃないでしょ。」

佐天「でも、結構時間短縮できるんですよ。」

初春「ダメです！」

佐天「え、でも」

固法「じゃあ青染くん佐天さんを送ってつてくれない？」

佐天「えっ！」

青染「あ、いいですよー。」

佐天「えっ?!いいんですか?!」

青染「別に平気だよー。」

固法「それじゃあ青染くん、佐天さんの事よろしくね。」

青染「はい。」

ーーーーー帰り道にてーーーーー

佐天「青染さんレベルアップが本当にあると思いますか？」

青染「さあ? あつたら面白いだろうけど、でもなかつたら最近の事件の説明ができな

いからねえ」

佐天「ではレベルアップが手に入ったらどうしますか？」

青染「逆に聞けけど佐天さんは使うの？」

佐天「使つて本当に能力者になれるのなら絶対使いたいですね。」

青染「じゃあもしそれが危険なものだったらどうするの？」

佐天「その場合は、、わかりません。」

青染「そりゃあわかんないよねえー。」

2人はそんな感じの話をしながら歩いていった。

佐天「青染さん、この路地裏通るとあたしの寮まで近いのでここ通りましょう。」

青染「佐天さん？さつき初春さんからやめとけって言われてたよね。」

佐天「バレなきやいいんですよ、バレなきやね。」

そう行つて2人は路地裏に入つていった。

――数分後――

青染「だから行つたのに。」

佐天「反省してまーす。」

2人は8人くらいのスキルアウトに絡まれていた。仮にそいつらの名前をA. B.

C. D. E. F. G. Hとしよう。

A「お前ら勝手に人の縄張りに入り込んだよなあ？」

B「覚悟はできてるんだよなあ？」

ピーチクパーチクランラン

青染「こいつらうるせえなあー。」

H 「ああ？ テメエなめてんのか?!」

青染 「イエイエマツタクナメテマセンヨ」

佐天 (絶対なめてる)

A 「とにかく、金払ってくれるなら通してやるよ。」

青染 「・・・ちなみにいくらですか？」

H 「5〜10万くらいだよお」

青染 (イラッ)

佐天 「高いですよ！」

G 「それだけ俺らの縄張りに入ることは危険なんだよ。」

F 「まあ変なことされたくなかったらさっさと金払えよ！」

急にその男が青染の胸ぐらをつかんだ。そしたら青染はその男の腹あたりを触れた。

そしたら彼の目の前にいた男が急に倒れた。急なことに青染以外は驚いた。

A 「お、お前こいつに何をした！」

青染 「さあ？」

A 「さあ？ じゃねーよ！ っていうか後ろにいた女はどこにやった！」

佐天 「えっ?!」

佐天涙子は絡まれてから一度もその場から離れていない。なのにスキルアウトの7

人は佐天涙子が見えていなかった。

青染「佐天さん、」

佐天「は、はい、?!」

青染「もうこいつらやつちやつていい?」

佐天「フエ?」

佐天がその反応をしてすぐに彼は消えた

A「なっ!まさかこいつ能力者k、H「グフオ!」!」

Aの目の前にいた彼が急にHの目の前に現れてみぞおちぐらいに蹴りを入れていた。

C「おい、後ろにいた女はどうした!」

佐天「え?!」

B「こ、こいつ空間移動能力者か!」

A(なるほど。空間移動能力者だったらあの女が消えたのも、あのガキが俺の目の前から消えたのも納得いく。)

佐天(いやいやいや、どう考えても空間移動能力者じゃないでしょ、だってあたしここにいるし。)

A「とりあえず全員こいつにかかれ!」

そして倒れていない6人が青染に向かった。そしたら彼は右足を持ち上げて思

いつきり地面を踏みつけた。瞬間

〃ドオン〃

突如彼を中心に地面に亀裂が走った。まるで彼のいる中心に重いなにかが落ちてきたような。そして彼は一番近くにいたGの顔を思いつきり殴った。

C「お、おい！こいつテレポーターじゃねーのかよ！」

B「と、とにかくいくら能力者でも5人でかかればなんとかなら、」

〃バタツ〃

彼の近くにいたA以外が急に倒れた。

A「ナツ！」

残っているのはAだけだった。

青染「安心してくださいよ。別に死んでませんから。でも早く救急車を呼ばないと危険ですよ。」

A「おつ、お前は何なんだよ！」

青染「能力者ですよ。ただそれだけです。」

A「ツ!!」

青染「早く救急車呼んだらどうですか？それともまだ僕とやるんですか？ねえ、どうなんですか？」

「バタツ」

Aが泡吹いて倒れた。

青染「では、片付いたので行きましよう佐天さん。」

そう言われた佐天は我に返った。

佐天「死んでませんよねえ？」

青染「ああ、そこは安心して誰も殺してないから。ただただ気絶しているだけだから。」

佐天「はあ」

青染「まあー救急車呼ぶか。呼んだらここをすぐに離れるよ。」

佐天「え？」

青染「だって一般人がスキルアウトを叩きのめしちゃったんだからバレたらやばいじゃ。」

佐天「やばいってわかってて何でやったんですか？」

青染「佐天さん、『バレなきや犯罪じゃない』って言葉知ってる？」

佐天「ワカリマシター。」

青染「よろしい。じゃ、救急車呼んだからもう行こうか。」

佐天「え！いつの間に呼んだんですか?!」

青染「友達がいるって素晴らしいよね！」

佐天「・・・ソーデスネ。」

そして佐天涙子は考えるのをやめた。

青染「そんじや、逃げますか。佐天さん。」

佐天「ハイ？」

青染「恥ずかしかったらごめんね。」

佐天「ふえ？」

次の瞬間青染は佐天さんをお姫様抱っこで持ち上げてた。

佐天「え！ちよ、ちよつとなにしてんるですか?！」

青染「なにつて、お姫様抱っこ？」

佐天「恥ずかしいです！」

青染「だからさつきごめんねって言ったじゃん」

佐天「でも！」

青染「『でも』も『だつて』もなにもない！」

佐天「・・・重くないんですか？」

青染「僕的能力で君を軽くしてるから重いと感しないよ。」

佐天（青染さんの能力っていったい？）

青染「そんじや佐天さん！」

佐天「はい!？」

怖かったらごめんね。

佐天「へ？」

そのとき、青染は上空2、30メートルぐらいまでジャンプしていた。

ニツゲルゾニツゲルゾスツタコラサツサ

——数分後——

青染「佐天さん大丈夫だった？」

佐天「ジェットコースターに乗った時と同じ感覚でしたね。」

青染「ちなみにジェットコースターは好きなの？」

佐天「好きですよ。」

青染「そつか、そりやよかった。」

佐天「それじゃあおやすみなさ〜い」

青染「うん、おやすみ。」

そう言つて青染は佐天に背を向けて歩き始めた。

佐天「青染さん！」

青染「ん？なに？」

佐天「青染さんの能力って何ですか？」

青染「……」

佐天「秘密ですか？」

青染「……じゃあさっきのお詫びとして教えてあげる。」

佐天「はい。」

青染「僕の能力は『数値改竄フェイクニユースだよ。』」

佐天「……『数値改竄』……ですか。」

青染「うん。じゃ、おやすみなさ〜い。」

佐天「あつ！はい。今日はありがとうございました。」

#6 増援その1

シノ「ねえねえ、さつきスキルアウトに絡まれてるときなんでわざわざ時間をかけて気絶させたのお？まさか佐天さんにカッコつけたかったのお？ねえねえどうなのお？」

青染「うっせー！意外とさつきのこと恥ずかしいって思ってるんだから黙っとけ！」

今、青染悠然はチームメイトであり、組織『パレット』の司令塔である足立忍の能力を使った煽りを受けている。彼はその煽りになんとか耐えているがそろそろ限界である。

海莉「シノちゃん、そろそろやめときな。もう、あと2、3回煽ったら袋が切れちゃう。」

シノ「え〜」

青染「そうだぞシノ。いい加減やめないと“ピー”が“ピー”なって“ピー”するぞ！嫌なら黙っとけ！このおかま！」

シノ「アイム ノット ア オカマ！ アイム ア ガール！このホモ！」

青染「僕はホモじゃねー！」

ノイマン「そうだぞシノ、こいつはホモというよりどちらかというところか」とシヨタコンだ。」
 青染「おまえら後で覚えとけよ！」

その会話が終わった後青染は音速を超えるスピードで拠点へ向かった。

———拠点にて———

シノ「いやーやつぱり悠然を煽るのは楽しいねえー。」

海莉「シノちゃん性格悪いよ。」

シノ「ええ。でも楽しいじゃん、煽るの。」

海莉「ええ（引き）。．．．そういえばノイマン、悠然くんシヨタコンなの？」

ノイマン「いや、あいつはシヨタコンどころかホモでもない。あいつの初恋は中学の時の同級生〇〇さんで、以前告白した時にはもう彼氏ができていて、シヨツクのあまり私が無理矢理ゼリー飲料を飲ませなければ餓死しかけたからな。つとシノ。」

シノ「なに〜？」

ノイマン「ご愁傷様。」

シノ「えっ？」

そしたら次の瞬間

〃バゴォーン〃!!!

足立忍は凄い勢いで体の半分が壁に埋まった。そしてシノが立っていた位置に青染

がいた。

青染「ノイマン、テメー何か遺言でもあるか？」

ノイマン「・・・シノちゃんが死んだ！」

海莉・青染「このひとでなしー！」

ズガン！！！！

その音がした後海莉が見たものは車椅子の真上で頭だけ天井に刺さっているノイマンの姿だった。

その時海莉の目には体の半分が壁に埋まっている忍、頭が天井に刺さってるノイマン、すごい地獄絵図だったしかし、

海莉「ノイマンが死んだ！」

青染「このひとでなしー！！」

このような状況でもふざける2人

海莉「んで、交渉うまくいったからもう青に頼んじやったからね。」

青染「了解。」

そして急に現実に戻る2人であった。

ーーーー次の日ーーーー

風紀委員177支部にて

初春「昨日は驚きでしたよ。」

白井「ほんとですわ。level4は人数が少ないのに、それが4人も来るなんて。」
初春「でもちゃんとこの場所わかりますかね？」

固法「地図渡してるから大丈夫だと思っけど。」

〃コンコン〃

固法「噂をすれば。どうぞー」

〃ガチャ〃

扉が開いてそこにいたのは少し黒髪で天パの少女と少し長い茶髪の大人しそうな少年だった。

楓「えくと依頼されてやってまいりました『パレット』の青の世継楓と、」

勇大「鳶山勇大です。」

固法「アアいらっしやい。どうぞ入って。」

楓／勇「失礼します。」

〃ガチャン〃

固法「それでははじめまして。私は固法美偉です。」

白井「白井黒子です。」

初春「初春飾利です。」

楓「どーも」

勇大「よろしくおねがいします。」

固法「それじゃあ仕事の確認だけど。今日から大体1ヶ月ぐらい風紀委員としてここで働くことが仕事です。そして働いてる間風紀委員の腕章を腕につけてもらいます。だから基本的に白井さん達をお手本にして。」

勇大「わかりました。」

初春「そういえば今日来るのは4人でしたよね。他の2人はどうしたんですか？」

楓「4人で話し合った結果いつぺんに4人で行くと思つて2人づつ来るこ
とになりました。」

固法「そっかー。」

勇大「ま、まあーとりあえず今日は何をすればいいですか？」

固法「今日、1人は白井さんと一緒にパトロールに行つてくれる？もう1人はここに残つて初春さんの手伝いをしてもらうから。」

楓「じゃああたしがここに残つて、勇大が白井さんと一緒にパトロールしてきて。」

勇大「うん、わかった。」

—————外で—————

勇大「白井さん、今日はよろしく願ひします。」

白井「はい、よろしくお願いいたしますの。」

そう言つて2人はパトロールを始めた。

――数分後――

パトロールでは特に事件が起こらなかった。

勇大「・・・増援呼んだ意味ありましたか？」

白井「おかしいですわね、最近はこんなに平和じゃなかった気がします。」

勇大「まあ、平和が1番なんですけどね。」

白井「そうですね、そういえば鳶山さん、あなたの能力はなんですか？」

勇大「ああ僕的能力ですか？どんな能力だと思いますか？」

白井「そうですね、ヒントをください。」

勇大「ヒントですか。いいですよ。ヒントは『触れていることが条件』です。」

白井（触れること。。。ではわたくしと同じ空間移動能力？、それとも空力使い？、

あつ、念動能力かもしれませんね。でも一応、）

「もう一つヒントをくださいまし。」

勇大「二つ目のヒントは『少し珍しい能力』です。」

白井「珍しいのならわたくしは答えることは難しいと思ひますが。」

勇大「どんな答えでもいいですよ。」

白井（珍しい能力、では念動能力ではないですね。空力使いでもない。ではやっぱり私と同系統の能力、空間移動能力でしょうか？）

勇大「答え決まりましたか？」

白井「……私と同じ空間移動能力でしょうか？」

勇大「……違います。」

白井「おや、そうなんですか？」

勇大「はい、それに『パレット』に空間移動能力者は1人しかいませんから。」

白井「1人いるんですか。」

勇大「はい。それも白井さんと同じlevel4です。」

白井「……その方は青のメンバ―の1人ですか？」

勇大「いいえ、彼女は赤のリーダーです。」

白井「あらまあそうなんですか？」

勇大「はい、でも白井さんの能力の方が強いかもしれません。」

白井「そうなんですか？」

勇大「はい。彼女は自分と一緒にしか他の物をレポートできません。」

白井「あら、そうですか。」

勇大「そのかわり範囲は自分が自ら足を踏み入れることがある座標だけです。」

白井「おやおやそれだけしかできないんですか。わたくしの下位互換なのでh・・・
まっつて、それって足を踏み入れたことのある場所ならどこへでも転移可能なの?」

勇大「はい。座標登録がしてあるなら学園都市内外、国内外への転移も可能です。ちなみに彼女はほぼすべての国の首都を登録してます。」

白井「・・・そうですか・・・」

勇大「あつ! 僕の能力を教えるのを忘れてましたね。」

白井「そういえばそうでしたね。」

勇大「僕の能力は『^{カーベンダー}形状変形』です。」

白井「『^{カーベンダー}形状変形』ですか?」

勇大「はい。この能力でh

ピーッ
!!!!

なっ!」

突如大きな音が響いた。

白井「向かいますしょう鳶山さん!」

勇大「はい!」

・・・

白井「どうやらATM荒らしでしょうか?」

勇大 「そうみたいですわね。あつ！犯人が出てきたみたいですよ。」

白井 「そう見たいですわね。では鳶山さん、行きますわよ。」

勇大 「はい！」

2人はATM荒らしのもとへ向かった。

またまたこの荒らしたちをA・B・Cとしよう。

A 「いそぐぞ！警報鳴ったからすぐに風紀委員が来るぞ！」

B 「早く車出せよC！」

C 「わかってる！」

白井 「させませんわ！」

A・B・C 「なっ！」

白井 「ジャツジメントですよ！」

え？つと白井の決め台詞を聞いて自分も行ったほうがいいのかとけつろんづけ、

勇大 「え〜つと、

ジャツジメントですよ。」

全員 「ブファ！」

白井 「ちよー!!ちよ、ちよつと鳶山さん!?なんでわたくしと同じなんですか?!」

勇大 「えっ?ダメですか？」

白井「わたくしと同じにしないでくださいまし！結構恥ずかしいですよ！」

勇大「え？じゃ、じゃーなんていえばいいんですか？」

白井「なんでもいいですよ！」

勇大「じゃー。」

ジャツジメントです！」

白井「それでいいですよ。・・・では一緒に、」

勇大「はい。」

「ジャツジメントです（の）!!!」

白井「ATM荒らしとしてご同行お願いいたしますの。」

A「へっ、誰がお前らなんかについていくかよ！」

そう言つて彼の自分の近くの近くの瓦礫が浮いた

A「これでもくらつとけ！」

そして瓦礫が2人にすごいスピードで飛んでいく。白井は勇大と一緒にテレポートしてかわした。

白井（念動能力ですか、おそろくなにかをATMにぶつけて荒らしたっていうところでしょうか？）

A「チツ、空間移動能力者か。」

そう言った次の瞬間白井はAの背後にテレポートして背中を蹴った。

A「ガッ！」

そう言つてAが倒れた。

〃シユン〃！

そして白井の金属矢が服とコンクリートに刺さつた。

B「おっおい、ヤベーじゃねーか！逃げるぞ〃ガツン〃つ痛」

何事かと思ひBが顔を上げたら目の前に壁があつた。いや、元々は平面の道路に壁ができてた。

B「なっ！」

そして彼は驚き無意識に後ろを振り返るとそこには壁に驚いている白井と、地面に右手をつけている勇大の姿があつた。

勇大「逃げるときは周りを気にした方がいいですよ。」

そう言つて彼は左手を地面につけた、その瞬間B・Cの周りにまた壁ができて、、気づいたら2人は真つ暗い場所にいた。いや、外から見たら小さな小屋ができていた。

C「まつ、真つ暗、なんだよこれ！」

B「おい、出せ！ここらか出せ！」

勇大「警備員が来るまでそんなかで待つててください。」

「……その頃177支部にて……」

初春「そういうえば世継さん、なんでパトロールじゃなくて書類整理、報告書作りを選んだんですか？」

楓「ああ、あたしの能力、戦闘や人を捕まえるのに適してないのよ。」

初春「ちなみにどんな能力ですか？」

楓「あたしの能力は色を操る能力よ。」

固法「どーゆー能力？」

楓「そうねえー

〃ガサゴソ〃

あつ、ちょうど色が付いてない絵があつた。」

そう言つて丁寧描かれている絵を広げて、見せた。

楓「この絵を見てて。」

初春「はい。」

固法「ええ、」

そしたら徐々に色が付いてない絵に色が付いてきた。

初春「わっ！」

固法「おおー！」

そして1秒ぐらいで広げられた絵は色鮮やかになった。

楓「これがあたしの能力『色彩操作』（カメレオン）です。」

固法「この能力、光学迷彩みたいなこともできるの？」

楓「はい、できますよ、。というか半径10m内はあたしの世界です。」

固法「おおー！」

初春「じゃあこの部屋をデコレーションしてください！」

固法「あつ、それ面白そうね。世継さんできる？」

楓「ええできますよ。」

—————数分後—————

2人はATM荒らしを警備員に引き渡した後。パトロールを終えて177支部に戻ってきた。しかし支部に戻ってみるといつもと思いつき違ってた。それは色だった。壁はが青だったり、赤だったり、机が水色だったり、桃色だったり。

白井「つまり、あなた方は世継さんの能力を見て面白そうだと思います、今の状況に至る、ということですか？」

楓「いや、これあたしのせいだと思うんだけど。」

白井「いえ、世継さんは悪くないですわ、これはやれと言った初春の責任ですから。」

楓「あ、そう」

白井「とうわけで初春、」

初春「はい。」

白井「これから1週間、佐天さんにスカートをめくられる前にその日自分が履いてるパンツの柄を申告する刑です。」

初春「え・・・」